

## フーガの試み・前奏曲とフーガ・3

Prelude and Fugue No.3 “Fugue of Halation” / composed by NT / Aug. 2002

この曲の Prelude 部分は、およそバロック音楽のイメージからは程遠く、ロマンチックで、ホモフォニックである。特に冒頭部分はスクリャーピンへのオマージュである。

とは言っても、私はここでも線的対位法による展開法を放棄しているわけではない。



あやしい雰囲気が始まった旋律は、9小節目からリズムカルな伴奏を伴い、次いで、ただちに性急な2/4拍子の音型にたどり着く。(13小節～)



この音型は、もう一つのリフレインとなるだろう。

構造化へと向かおうとしないこの音楽は、やがて自由な歌へと発展していく。35小節目以降は、明らかにホモフォニー様式による、ロマンチックな心情の発露である。



ここでは低音部は、ただの伴奏と化している。

それでも、47小節以降の主題の再現において再びバス声部が歌い始めるのだが、あの2/4拍子の音型によって阻まれ、

神秘和音の中で崩壊する。

57 小節～61 小節は、ただの間奏である。それは、神秘和音の高揚を一気に静めるためだけに存在する。



62 小節から**フーガ**に入る。



この**フーガ主題**は何なのか。実は、これの正体は、下のような譜面に直さなければ把握できない。



アクセント記号を追っていけば、このメロディーが浮かんでくる。要は、真の主題が、16 分音符の分散和音的な流れの中に埋め込まれ、常に和声の推移を伴って出現するというのだ。これが題名の由来である。Fugue of Halation ハレーション(光量)の中に、フーガが隠されているのだ。

そして、この 16 分音符は常に可動的であり、次の声部で(4 度下で)主題が繰り返される時、その過剰な装飾の異なった配列の中で、再び主題は隠れてしまう。

ところで、念のため書いておくと、フーガとは、各声部における(主として 5 度関係のなかで転調しながらの)主題の模倣を基軸とする書法だが、この私の曲は主題の書法に見られるように、かなりの逸脱を示しながらも、何とか基本形を守っている。

16 分音符のハレーションで真の主題を隠してしまうようなやり方は、まあ、一種のいたずらではあるが、ふつうは単一声部で単旋律として提示される最初の主題部を、何とか近現代的な和声を伴って表そうという、苦肉の策でもある。

そして、16 分音符の自在な変容によって、おなじ主題をしつこく繰り返すことによるフーガ様式の「単調さ」「しつこさ」といった弱点を何とかしてやりたかったのだ。…もっとも、この点は成功しなかったかもしれない。

さて、この 3 声フーガにおける最初の主題提示部は、ゆっくりとソプラノ テナー(アルト) バスと推移していくが、その網目には、16 分音符と 32 部音符による付点リズムの動機が繰り返される。



(69-70 小節)

これはもちろん、Prelude に現れた付点リズムの反映である。この装飾音型は、3 連符にも推移する。

そして、いったん 3 声部により一通り主題の提示が終わると、この音型が 16 分音符の静穏なリズムを破壊し、音楽を動的なものへと突き動かす。88 小節からは主題の再現であるが、ここでは 16 分音符の均等のリズムは変質している。そして、ス

トレッタ(ある声部による主題の提示が終わるのを待たずに、別の声部で主題が始められることにより、主題が少しずつ重なり合い緊張感を強めるといった、フーガの主要な技法)を形成する。

動的な要素の凝集から、一気に音楽は、異なる平面を切り開こうとするだろう。

95 小節から、2/8 拍子で**第2 主題**が提示される。(言うまでもないが、このフーガ主題も5 度関係の中で模倣される。)

明確な調性を持たないこの主題はぎくしゃくしたスタッカート率を率いて出現する。102-103 小節のアルト声部と104-105 小節のバスには、第1 主題のひそかな変形が現れる。

106 小節から3/8 拍子に変わり、いっそうの「ぎこちなさ」を強調するが、これは実は第3の主題の登場を準備しているのである。また、第2 主題は反行形(主題の各音の音程関係を上下逆さまにしたかたち)でも繰り返される(107 小節のバス、108 小節のソプラノ)。

新しい主題は110 小節で出現する。

この主題はもちろん、**Prelude の主題**である。

ただしこれは正確にいうと第3の「フーガ主題」ではない。フーガ的に処理されないからだ。  
このあと、音楽は Prelude の構造を模倣して一気に2拍子のあの音型に突入する。



(118 小節～)

そしてここでもまた、神秘和音が対位法を中断してしまう。

122 小節からは、もう一度第1主題が再現される。



実は122小節の末尾から、バス声部が既に4度下で主題の模倣に入っているため、126小節でもう一度、同じ声部が同じ音高で主題を繰り返すとき、執拗な感じを免れられないだろう。

このあと、第2主題を断片的に挿入しながら、Preludeの主題を再現させ、神秘和音へと向かって推進する。

総じて、このフーガにおいてはフーガらしい濃密さは顕著ではない。第1の主題の登場回数も、とても少ない。

ここでの作者の興味は、異なる音楽の層のなかを移動しながら、音楽に広がりを持たせることにあった。しかし、それはまだ十分ではない。工夫の末に開発したハレーションの主題が、逆に足かせにもなっていたようにも思われるのだが…。

無断転載・複製を禁ずる。

Copyright © 2002 NT. All rights reserved.